大江健三郎の出発点

――『奇妙な仕事』の《監禁》状態――

村瀬良子

一《監禁》の主題と大江の問題意識

大江健三郎の第一創作集である『死者の奢り』（一九五八三月、文藝春秋社）の後記には、《監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした。》とある。このような主題にこだわることの背景にあるはずの、大江の問題意識はどのようなものなのだろうか。

この主題の生成についての松原新一氏の〈推定〉は、大江のこだわりのゆえんに、何とか分け入ろうとするものだったといえよう。松原氏は、大江の〈深刻な孤立の感覚〉、〈他人と自分との間に介在する「厚い粘液質の膜」による疎隔の思いから生ずる、一種の他人嫌悪、現実嫌悪という受動的な姿勢〉が、この主題と根底の所で結びついているのだという。大江個人の〈不幸の構造〉と、時代の状況（〈「時代閉塞の現状」〉）とのアナロジーの確信のうえに、この主題が生成したということである（注一）。

しかし、この〈推定〉も、拓殖光彦氏がいうように、〈大江のテーマがなぜ監禁状態であってほかのものではなかったかという疑問の真の回答にはっていない〉のであって、以来、この主題を据えた大江の問題意識については、漠然としたままであるようだ。そのことが、ときに、この主題への過小評価につながってきたともいえる（注二）。

閉塞感・虚無感・無力感といった、《監禁》状態に生きる人間の感情のレベルに、寄りそうようにして（あるいは反発するようにして）メッセージを受け止めることは、これまで普通におこなわれてきたことである。しかしそれでは、〈なぜ監禁状態〉なのか、という根本的なところに触れえない。この疑問に対しては、《閉ざされた壁のなかに生きる》ことの問題を大江がどのあたりに見ていたのかを、具体的な形で明らかにしてゆくことが、どうしても必要になるだろう。次に引用するエッセイは、そのための一つの手がかりとなる。

《今後の仕事（筆者注―第一創作集の後の仕事）でも、ぼくもやはりあいまいな閉ざされた状況にいる人間を書きたいと思う。僕はそういう状況のなかで、やるせないいら立ちに身もだえし、あるいは

狂気のように騒ぎたて、あるいは無気力に沈黙している、同年代の多くの人間を見てきている。

たとえば昨年のこと、学校のアーケードのなかにボロをまとってがんばっていたハンストの学生たちが、おそらくは飢えのためにネズミのような顔をしてごそごそはい出てきた時、まわりの群れた見物の学生のあいだにまきおこった小さい笑いや怒りのどよめきを、ぼくは書きたいと思う。

そしてぼくはそういう要素がファシズムとむすびつきはじめる、芽の部分を摘発したいと考える。≫(注三)

さらに、同じエッセイの別の箇所において、閉ざされた状況にあることがどのようにファシズムに結びつくのかということを、ある程度分析的にとらえてもいる。大江によれば、≪あいまいに閉ざされているために、しだいにリアリスチクな判断力や分析力が衰退したあげく、持続的なエネルギーもうしなって怒りっぽく非論理的になった若い精神の行きつくところは、おおかれ少なかれファシズムにつながる≫のである。

なお、この論理は、≪エジプトの土の家に泥まみれになって眠り、ナセルの軍隊に加わって戦いたい≫という、≪非論理的で甘美に英雄的な衝動≫にとらわれた経験にたって導き出されている。この衝動は、むろん論理的に導き出されたものではなく、感覚における充足の欲求を満たそうとするものであるが、この場合は、そのことがファシズムに繋っているのである。人間を閉ざす壁を論理的に切り開く方向では不充足しかえられず、そのかわりに感覚における充足に向かうこと、さらにそれがファシズムに繋ることに、大江は、閉ざされた状況にあることの問題の一つを見ているといえる。

≪監禁≫状態へのこのような問題意識は、なんらかの形で小説に投影されていないだろうか。このエッセイでは、先のファシズムへの論理が、作家としての出発点である『奇妙な仕事』(注四)を書くための、≪軸になる論理≫として意識されていたこともいわれているのである。そこで、『奇妙な仕事』をみると、やはり、閉ざされた状況にあることの問題についての、構造的把握が基盤にあることを思わせる。

ただ、先のエッセイで表明されている大江の問題意識と、『奇妙な仕事』に現れている問題との間には、かなりずれがあるようだ。エッセイによると、『奇妙な仕事』を書く段階において既に、大江は、ファシズムに繋る若い精神を問題視していたことになる。しかし、「奇妙な仕事」においては、不充足から充足へ向かうことは、必ずしもファシズムに繋ることではなく、また、一義的に批判されているわけではないと思われる。むしろ、充足はいかに可能か、といった痛切な問いが、小説のモチーフとしてあるようだ。これに対し、先のエッセイの大きなモチーフのひとつはファシズムの芽の摘発というところにあって、大江は、自作の成立の経緯を、特にそこに引きつけて意識しているのかもしれない。

以下、本稿では『奇妙な仕事』をとりあげ、大江がその出発点において、閉ざされた状態に生きることの問題をどのように捉えていたのかを探りたい。『奇妙な仕事』の主要な登場人物は、大学生の≪僕≫、≪私大生≫、≪女子学生≫、犬を殺すことを専門にしている男≪犬殺し≫の四人である。三人の学生は、大学病院で実験用に飼われている一五〇匹の犬を殺すアルバイトに参加する。この四人の作品における

位置を、論理の不可能性と不充足、及び感覚における充足、という観点から見ると、次のようになっている。論理の不可能性と不充足のなかにある状態から、感覚における充足へ向かおうとするのは、《僕》と《女子学生》である。《犬殺し》は問題を隠蔽することによって、小説の最初から感情・感覚的に充足した状態で登場する。《私大生》は、隠蔽されている問題を顕在化させ、感覚における充足がはらむ問題を明らかにする役割を果たしている。《女子学生》は、感覚における充足に向かいつつ、問題を《私大生》よりも深い所でとらえ、感覚における充足の問題点と意義を提示している。

二　《僕》と《女子学生》の不充足と論理の不可能性

最初に、《僕》と《女子学生》が、どのようなことに対して論理の不可能性を見、不充足に陥っているのかを、明らかにしたい。まず、《僕》について、アルバイトを引き受ける以前からの時間の進行にそって、みておきたい。

《僕》は、《政治をふくめてほとんどあらゆることに》熱中できないでいる。学生運動にも参加できない。その理由は、《政治に興味を持たない》ためでもあるが、結局は、《持続的な怒り》を持ち得なくなっているためだという。そして、《僕》は、《持続的な怒り》の欠如を《ひどく苛だたしく思うこともあり、自分の現状への不満を明らかにしている。つまり、《僕》は、政治的興味から学生運動に参加したいわけではなく、参加できるとすれば《怒り》の感情によってだというのである。《僕》を動かすものは、感情的なものであるといえる。《僕》にとって感情的なものが重要であることは、自分たち学生のことを次のように言うところにも現れている。

《すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。しかし僕はあまり政治的な興味を持ってはいなかった。》

この認識においても、《僕》は《敵意》の欠如ということを言う。この《敵意》とは、論理的なものというより、多分に感情的なものである。

このように、論理的なものよりも、《怒り》や《敵意》といった感情的なものの欠如が問題にされていることは、何を意味しているだろうか。《僕》は、政治に興味を持っていないというが、それは学生運動における論理については、逆に問題にしていないということではないか。《僕》にとって可能であるのは論理ではなく、学生運動を論理的に進めても、不充足に陥るのみだとの認識があるのだろう。《僕》に可能であるのは、感情的なものでしかない。そして、その感情さえも持続できない状態にあり、《僕》はやはり不充足に陥っているのである。

なお、アルバイトを引き受けることで《僕》が犬に接近していったのは、その声が、《僕》の失いかけている《怒り》の声として聞こえてきたためであろう。しかし、犬殺しの現場で対面した犬たちは、《敵意をすっかりなくしている》つまらないもの、《僕》の現状のアナロジーでしかなかった。《僕》の犬への興味はたちまちにして失われ、《僕》は再びもとの不充足に陥る。

また、小説の結末近くで、犬にかまれることによって、《僕》は自

分自身の死の問題を突きつけられる。そのとき≪僕≫は、やはり、その問題についてほとんどなにも考えることができないのである。

≪そうよ、恐水症になりたくないでしょ。

僕は長椅子に腕を下し目を伏せた。爪の周りの皮膚のささくれだった草が膝の上で慄えた。

恐水症か。

そうよ。

あの予防注射はそんなに簡単じゃないんだろ。

生きるか、死ぬかよ。時にはね、と看護婦はそっけなくいった。

ああ、と僕は呻いた。なんだかひどく落ちこんでしまったな。

何を考えているの?

犬の歯なみのことさ、と僕は怒っていった。≫

≪僕≫は、自身を襲う死を思って恐怖を感じている。≪僕≫は、いわば個体の死という壁に閉ざされているのだが、これを打破する論理はなく、≪ひどく落ちこんでしま≫う。≪犬の歯なみのことさ≫と怒っていうことには、何を考えることもできないことへの、自虐やアイロニーがこめられているだろう。

≪女子学生≫は、どのようなことに論理の不可能性を見ているだろうか。この人物は≪文化≫という言葉で覆い隠されているものの、≪きれいごとじゃない≫実態に目を向けている。アルバイトの現場で行われている犬殺しも、≪女子学生≫から見れば、そのようなもののひとつである。

犬を殺すのに毒を使わずに棒で殺すべきだと主張する≪犬殺し≫について、≪女子学生≫はその≪伝統意識≫や≪誇り≫を指摘する。

≪あの男にはね、と毛皮をさげて歩きながら女子学生はいった。伝統意識のようなものがあるわ。棒で殺すことに誇りを持っているのね。それが生活の意味なのよ。≫

しかし≪女子学生≫は、その≪文化意識≫でおおわれた犬殺しの実際的なところが、否定的なものにみちていることも見逃していない。

≪生活の中の文化意識、と女子学生はいった。桶屋の技術が桶屋の文化だ、そういう文化が生活としっかり結びついた本当の文化だ、というようなことを評論家が書くでしょう。あたりまえなことでね。ところが、一つ一つ実例をあたってみるとね、そんなにきれいごとじゃないのよ。犬殺しの文化、淫売の文化、会社重役の文化。汚らしくて、じめじめして根強くて、似たりよったりよ。≫

次に引用するのは、≪僕≫の目を通してとらえた犬殺しの方法であるが、それはだまし討ちとも言えるもので、≪僕≫はそれについて、≪息がつまるほど卑劣なやりかた≫だといっている。

≪背にすばやく棒を隠して犬殺しはなにげなく近づいて来、僕が紐をもったまま充分に距離を犬からあけると、さっと棒を振りおろし、犬は高く啼いて倒れた。≫

このように、犬をうまく殺すためには、人間性の否定的な側面（≪卑劣≫さ）を発揮しなければならないのである。また、棒で殴り殺すことも毒で殺すことも、暴力の行使には違いないことも、女子学生の意識にはあるだろう。このような否定的な面を、人間性の観点から単純に非難することは可能だが、犬を殺すことが≪生活≫と結びついている時、人間性を問うことはそれだけ難しくなってくる。そのことは、≪犬殺し≫の立場に立って考えれば、人間性の否定的側面を≪誇り≫

や《文化》という意識で覆わなければ、生きることは苦しいということである。《生活》とはそのようなものだと、《女子学生》は考えている。そしてそのことは、《犬殺し》や《淫売》や《会社重役》に限ったことではなく、もっと普遍的な問題だという。

《足をつっこむとかなんとかいうのじゃなくてね、もうみんな首までとっぷりつかっているのよ。伝統的な文化の泥で泥まみれなのよ。簡単に洗うことはできないわ。》

ここで《文化の泥》といっているように、《女子学生》は、《生活》のために人間性の問題を不問に付すことを是としていない。ただ、生活が関係してくると、人間性を問うことが難しいために、あきらめに近いものを抱いているのである。

また、《女子学生》は脚気を病んでいる。《文化》について《僕》と話している時に、《脚気の新薬》を飲んでいることを言い、その病状を《僕》に示してみせる。

《ほら、と女子学生は屈みこんで浮腫んだふくらはぎを指の腹で押して見せた。青黒い窪みができ、それはゆっくり回復したが、もとどおりにはならなかった。

ひどいでしょ、いつもこうなのよ。》

《絶望しているわけでもないのよ》と《意地悪な眼で僕を見かえしながら》いう《女子学生》にとって、この病は、かなりの程度彼女を圧迫してくるものであろう。脚気が心臓をおかした場合命にかかわることを考えると、彼女は個体の死の問題を身近に感じ、その問題に閉ざされているのかもしれない。ただ、《女子学生》の場合も、できることは《新薬》を飲むくらいのことである。

以上のように、《僕》と《女子学生》は、共々、彼らを取り巻いている状況について、また個体の死の問題について、論理の不可能性を見、不充足に陥っている。

三　《犬殺し》による隠蔽・自己欺瞞と感覚的充足の問題

先のところでは、《女子学生》の問題意識を明らかにすることを通して、《犬殺し》の《文化意識》や《誇り》の問題を見た。ここでは、《犬殺し》自身の言うところから考えてみたい。彼は、犬を殺すことにまつわって生じる問題を隠蔽し、また自己欺瞞に陥っている。そして、そのことによって、感情的・感覚的な充足を得ている。従って、彼の充足には問題があることになる。また、四で問題にする《僕》の感覚的充足のうちのいくつかは、《犬殺し》の充足に同調するようにして可能となっている。そこで《僕》の充足の問題を検討するに先だって、《犬殺し》の充足の問題を考えておきたい。

次に引用するのは、犬を殺す際になぜ毒を使わず棒を使うのかを、《犬殺し》が《僕》に話すところである。ここで《犬殺し》は、毒を使うのは《汚いまね》であって、犬の前に棒を持って立ちふさがるのが本当だという。

《そうなんだ、俺はしかし毒は使わない。毒で犬を殺す間、日陰でお茶を飲んでいるようなことを俺はしたくない。犬を殺す以上は、犬の前に棒をもって立ちふさがらなくちゃ本当でないだろう。俺は子供の時からこの棒でやって来たんだ。犬を殺すのに毒を使うような汚いまねはできない。》

しかし、《犬殺し》が実際にとっている方法は、《僕》が《卑劣なやりかた》と感じたような、だまし討ち的な方法であった。その方法と《汚いまね》との違いは、絶対的なものではない。ただ、《生活ということを視野に入れた時、《犬殺し》の《卑劣》も致し方ないということは、先に述べたことである。《女子学生》の捉え方では、《犬殺し》は、人間性の否定的な側面を《文化意識》で隠蔽することによって生きているのであった。先の《犬殺し》の言葉に即してみれば、彼は、《卑劣》さを、《犬の前に棒をもって立ちふさがる》という《卑劣》とは逆のイメージに仕立てあげることによって、《卑劣》という人間性の問題を隠蔽していることになる。このとき、《犬殺し》には隠蔽しているという自覚はないようであり、彼は自己欺瞞に陥っているといえる。そのことによって、自己の正当性による感情的な充足を得ているのである。

しかし、彼が隠蔽するものは、《卑劣》さだけではない。毒を使わない理由としては、次の引用で言われていることも大きい。

《それに、毒を使うとね、死んだ犬が厭な臭いをたてるんだ。犬には良い匂いをたてて、湯気をあげながら皮を剥かれる権利があるとは思わないか。》

ここで《犬殺し》が隠蔽しているのは、死（死体）の忌まわしい側面である。棒で殴り殺し即座に皮を剥ぐという方法をとれば、厭な臭いとは逆の、《良い匂い》・《湯気》といった、どこか快楽的なもの、感覚的な充足さえ得ることができるのである。ただしこのことは、人間が犬の死を受け止める際に問題になってくることである。従って、犬の《権利》とは、人間に良く受け止められる権利、ということになる。そして、これは犬にとっての死の問題を除外した上での、犬のため、という発想なのである。それを犬の《権利》だと《まじめに》いう《犬殺し》は、やはり自己欺瞞に陥っていることになる。《俺は毒つかいどもとは訳がちがう。俺は犬を好きだからな。》という、この《犬殺し》の言葉からも、自己欺瞞による感情の充足を読み取ることができる。

これに対し、《私大生》は、《犬殺し》の《卑劣》を批難することで、《犬殺し》が隠蔽する死にまつわる問題を、結果的に暴露する。《私大生》は、《犬殺し》が犬をうまく殺すために手なずけることを、《卑劣》だといって盛んに非難し、ついに《卑劣》ではない方法で犬を殺そうとする。次に引用するのは、その結果、死の暴力性が顕在化したくだりである。

《それから急に犬殺し棒をひろいあげると囲いの杭につないだ犬に向かって走っていった。犬は棒を振りかぶった私大生に激しく吠えた。私大生はたじろぎ、しかし進んで行き、跳びかかってくる犬の耳の上に一撃を加えた。犬は跳ねとばされ囲いに打ちつけられて悲鳴をあげたが死ななかった。口から血をはきながら苦しがっていざり歩いた。私大生は立ちどまったまま荒い息をして犬を見つめていた。

おい、やっつけろ、と犬殺しが怒りをふくんだ声で叫んだ。犬を苦しめるな。》

ここで筆者がいう死の暴力性とは、死にともなって個体に肉体的苦痛と恐怖がもたらされることを指している。右の引用には、犬の苦痛と恐怖がよく現れているが、これは、《卑劣なやりかた》によって、

≪犬殺し≫が結果的に隠蔽してきたものである。これまで述べてきた彼の感情的・感覚的な充足の陰には、このようなものがあったわけである。

ただ、≪犬殺し≫の方法においては、死の暴力性が人間に見えにくくなることと、犬の死の苦痛や恐怖の軽減とが、表裏一体となっている。そして、死の暴力性の問題については、無い方が良いとしか言えないことに、≪犬殺し≫の方法を単純に批判できない理由がある。≪私大生≫にしても、≪卑劣≫という点での人間性の問題を言うのみで、犬の苦痛と恐怖の問題については、なんら考えを持っていない。先の引用に続く所で、≪僕≫が犬を殴り殺し、その苦痛を止めたことについて、≪私大生≫は、≪きみは卑怯だ。あの犬は無抵抗で、弱りきっていた。≫としか言わない。つまり、この小説において、死の暴力性に対する何らかの解答は出されていないのである。≪犬殺し≫の方法はその問題を無化している点では危険だとも言える。彼は、自分のその方法によって死の暴力性が見えなくなってしまい、その上で、感情的・感覚的な充足を得てしまっている(注五)。ただ、≪犬殺し≫のそのような充足は、やはり、犬を殺すことによって生活しているということと、切り離して批判することが難しい、そのようなやっかいさも備えている。

四 ≪僕≫と≪女子学生≫の感覚的充足―その問題点と意義

二で指摘したように、≪僕≫も≪女子学生≫も、彼らを取り巻く状況と、自らの死の問題(≪僕≫の場合は結末に至って)に、論理の不可能性を見、不充足に陥っている。そして、彼らは、その不充足を、論理を構築することによってではなく、感覚的なところでの充足でもって、埋めようとしているようである。ここでは、そのことの問題と意義を明らかにしたい。

≪僕≫と≪女子学生≫とでは、感覚的なところへのむかい方が、かなり違っているようだ。≪女子学生≫は、二でみたように、≪犬殺し≫の≪生活のなかの文化意識≫に批判的な目を向けているが、≪僕≫には、≪犬殺し≫の充足に同調しているようなところがある。まず、そのような≪僕≫の充足について考えたい。次に引用する箇所には、≪犬殺し≫が犬を殴り殺し皮を剥ぐところをみて、≪僕≫がそれに引きつけられてゆく様子が現れている。

≪腰の皮帯から抜きとった広い包丁を犬の喉にさしこみ、バケツへ血を流し出してから、あざやかな手なみで皮を剥ぎとる犬殺しを見ながら僕は生あたたかい犬の血の臭いと特殊な感情の動揺とを感じた。

なんという卑劣さだろう。しかし今、眼の前で犬の処理をしている男の機能的な卑劣さ、素早く行動化された卑劣さは、すでに非難されるべきではないと思われた。≫

≪僕≫はさらに、この行動について、≪生活意識の根底で極めて場所をえている卑劣さ≫だと思う。これは、≪女子学生≫のいう≪生活のなかの文化意識≫と通じる受け止め方だが、≪僕≫の場合は、結局それを認めてしまう。そして、≪犬殺し≫によって処理された犬の死体に、快楽的なものを感じとるのである。

≪まっ白く皮を剥がれた、こじんまりしてつつましい犬の死体を僕

は揃えた後足を持ちあげて囲いの外へ出て行く。犬は暖かい匂いをたて、犬の筋肉は僕の掌の中で、飛び込み台の上の水泳選手のそれのように勢いよく収縮した。≫

≪僕≫は、犬の死体の≪暖かい匂い≫と、掌のなかの犬の足が≪勢いよく収縮≫する感触を得ている。ここには、感覚を鮮やかに刺激するものがある。加えて、≪僕≫の目を通したこの死体の有様は、皮を剥がれているためか、死体の忌わしさを喚起せず、犬の死体とは別の何かのようでさえある。三で≪犬殺し≫の充足の問題を検討した際に、≪犬殺し≫の犬の処理の方法が、死体の忌わしさを隠蔽し、逆に感覚的な充足を与えるものであることを見た。さらに、その方法は、死の暴力性を隠蔽するものであり、彼の充足はその上に成り立っていた点で、問題があったわけである。ここにあげた≪僕≫の充足は、≪犬殺し≫の充足の問題を受け継いでいることになる。

≪僕≫が≪犬殺し≫に同調することで、充足を得る様子をもうひとつ見ておきたい。それは、毒を使う理由を≪犬殺し≫が説明するところであるが、そこで≪僕≫は、≪犬殺し≫の言葉によって笑っている。

≪それに、毒を使うとね、死んだ犬が厭な臭いをたてるんだ。犬には良い匂いをたてて、湯気をあげながら皮を剥かれる権利があるとは思わないか。

僕は笑った。≫

≪僕≫のこの笑いは、先にあげた引用にも現れている、犬の死体から得られる快楽的なものの上に、犬に≪皮を剥がれる権利がある≫という言い方による感覚の刺激が加わって、引き起こされたものであろう。ただここでも、≪皮を剥がれる権利がある≫という言葉には、≪犬殺し≫の自己欺瞞が指摘できたのだった。それに対して無批判である≪僕≫のこの充足にも、やはり≪犬殺し≫の問題が受け継がれている。

しかしともかく、≪僕≫はこのようにしばしば笑う。≪僕≫の感覚がもっとも刺激されている場合、つまり、それだけ充足度が高い笑いは、次のようなものである。

≪しかし、スピッツとセパアドの混血としか思えない不思議な犬を見つけた時は、おかしさが虫のように躰中をはしりまわった。犬はセパアドの頭をし、白い毛をふさふさ、暖かい風になぶられていた。僕は声をあげて笑った。≫

≪僕≫はさらに、≪私大生≫に対して、スピッツとセパアドが交尾している恰好はひどくおかしいよ≫と、想像力を働かせている。

このような≪僕≫に対し、≪私大生≫は≪むっと唇をとがらせ顔をそむけ≫る。この≪私大生≫は、≪あなたはユマニストね≫と≪女子学生≫から指摘されるように、人間性にひどくこだわっている。このような立場から見れば、格好の悪いもの、しかもすぐにも殺されるものを笑うことは、人間性を疑われることであろう。しかし、そもそも笑いというものは格好の悪いもの、何かの欠陥のあるものによって引き起こされるという、反倫理的な側面を持っている。そのような笑いは倫理には反するが、笑いたいという欲求における、充足度が高いと思われる(注六)。これに対し≪私大生≫は、≪僕≫の充足を封じ込めようとする、倫理の体現者ともいえる。

次に引用するのは、このような倫理・反倫理の二項対立を崩そうと

する、≪僕≫の試みといってよいだろう。≪僕≫は、自分の掌が生ぐさく臭うことに気づいて、≪犬を二十匹殺した後の僕の掌は耳をなでるためにしか犬に触れなかった僕の掌とはちがう≫と思う。

ここからは、犬殺しに荷担する≪僕≫が、自分を反倫理的だと認識していることがわかる。この述懐の直後、≪僕は仔犬を買おうかな≫と≪女子学生≫に言う。

≪雑種のとてもけちな赤犬を買うよ。その犬はね、一五〇匹の犬の怨みを全身に背負うということになるんだ。顔が歪むほど僻んだ厭な犬になるだろうな。

僕は笑ったが女子学生は唇を硬く噛みしめていた。≫

≪僕≫のこの笑いは、自分の反倫理的なところを引き受けつつ、反倫理性によって引き起こされた事態を、笑いの対象にするというものである。≪顔が歪むほど僻んだ厭な犬≫は、≪僕≫の反倫理性を非難するものであると同時に、いびつなもの、誇張されたもののおかしみを待ち、≪僕≫の笑いを誘う。ここには、倫理の問題における≪僕≫の不充足があるが、≪僕≫は、笑いによってそれを解消しようとしている。

しかし、唇を硬く噛みしめ≪私たちはとても厭らしいわ≫という≪女子学生≫によって、≪僕≫の試みは否定される。この≪女子学生≫は、≪生活のなかの文化意識≫の問題を見、≪私大生≫に≪ユマニスト≫だと≪味けない声≫で言うことによって、彼のユマニズムの狭隘さを見ている。このような点から、≪女子学生≫は、この作品において批評性を発揮する人物であり、その批評はかなり妥当だといえる。≪女子学生≫をこのようなものとしてみた時に、≪僕≫を否定する右の言葉は、かなり強く機能しているといえる。

では、≪女子学生≫自身は、どのような感覚的充足に向かおうとしているだろうか。次に引用する箇所では、倫理に抵触しない笑いを考えているようである。

≪ええ、私のような性格だと笑うことはあまりないのよ。子供の時だって笑わなかったわ。それで、時々、笑いかたを忘れたような気がするとね、火山のことを考えて涙を流して笑ったわ。巨きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ているなんて、おかしいなあ。女子学生は肩を波うたせて笑った。≫

しかし筆者は、この笑いに≪女子学生≫の故意を感じる。もちろん、何におかしさを感じるかは、個人によってかなり違うだろうが、彼女は、火山を無理に笑おうとしているのではないか。それは、火山について一種の卑俗化をすることによって、可能になっているようだ。つまり、火山を、≪巨きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ている≫ものとすることで、一般的には勇壮なイメージを持つ火山が、滑稽なものになり変わるのである。このようにして火山を笑えば、犬の無格好を笑うというような、反倫理的なことは避けられる。

≪女子学生≫の笑うことがあまりない≪性格≫とは、≪文化意識≫で覆い隠されている人間性の問題を見てしまうところと、関係があるだろう。彼女自身が≪ユマニスト≫としての一面を持っていて、笑いの反倫理的な側面にこだわっているのだと思われる。≪女子学生≫は、このような笑いを提示することによっても、≪犬殺し≫や≪僕≫の充足の問題点を指摘しているようだ。ただし、この笑いは、いかにも充

足をもたらしそうではない。≪ユマニスト≫であることの味気なさを、≪女子学生≫は、自分自身に対しても抱いているのかもしれない。ただ、火山を見に行きたいという≪女子学生≫は、笑うことによって充足したいと強く思っている。この欲求は倫理によって封じられがちだが、かといってこの欲求を失ってしまえば、≪女子学生≫にはなにも残らない、そのように重要なものである。ユマニズム、対、笑いへの欲求の問題は、≪僕≫と≪女子学生≫に共通の問題だといえそうである。

小説の結末で、≪僕≫は自分達について次のように言う。

≪僕らは犬を殺すつもりだったろ、とあいまいな声で僕はいった。ところが殺されるのは僕らの方だ。≫

この≪殺される≫ということについて、それを行動における死とも、精神における死とも解釈できよう。また、≪僕≫個人に出てきた間近な死の可能性を、重ねてみてもよいだろう。いずれにしても、≪僕≫たちはそのような不充足にあって、なおも笑おうとしている。犬を殺すつもりだった、ところが、殺されるのは≪僕≫らの方だった、という逆転によって、≪僕≫は笑いを誘っている。ただ、そのようにして生じた笑いは、充足からは程遠いものである。

≪女子学生が眉をしかめ、声だけ笑った。僕も疲れきって笑った。≫

このようにして、感覚的充足は、結局のところ無力であるということも言われているのである。

四　≪監禁≫状態と充足をさえぎるもの

これまで明らかにしてきたことをもとに、閉ざされた壁のなかに生きることの問題を、次のように構造化できるだろう。人間を閉ざす壁を切り開く論理の不可能性のために不充足に陥っている状態から、感覚における充足へ向かう際に、抵抗感が生じてしまうのは、不充足に陥らせる壁が倫理の問題と直接関わっている場合である。その場合、壁の隠蔽や自己欺瞞によって、感覚における充足を得ることになる（≪犬殺し≫の充足）。（またこの場合隠蔽や自己欺瞞をさけて、感覚における充足を得る道筋も考えられるが、小説にはこの道筋をとろうとするものはいない。）隠蔽や自己欺瞞によって得られた充足は、倫理の問題を残したままだということで問題がある。しかし、それが≪生活≫によって必要とされているために、≪文化意識≫として≪根強≫く存在する。

また、人間を閉ざす壁が倫理と直接関わらない場合でも、感覚における充足が抵抗感をはらむ場合がある。それは、感覚的充足と倫理とは、必ずしも折り合いがつかないからである。特に笑いにおいては反倫理的側面が強く、倫理の問題が、笑いによる感覚的充足を容易にしない。またその充足はしばしば封じられる（≪僕≫の充足）。そうである以上、倫理に抵触しない充足を求めるしかないが、そのぶん大きな充足は容易ではない（≪女子学生≫の充足）。

そして、どの場合にしても、感覚における充足は根本的な解決ではない。かといって、人物たちはそれを軽視できず、それを拠り所にするしかないような状態にある。

問題をこのように構造化してみたうえで、やはり、《監禁》状態とは、大江にとって、それだけの重さを持った主題だった、と考えている。充足感と併存してしまう抵抗感とは、後々までも大江の文学を特徴づけるものの一つであろう。いま筆者の念頭にあるのは、このような抵抗感が、《監禁》の主題を執拗に繰り返させ、また、その展開を方向づけているのではないか、ということである。

注

一　松原新一　『大江健三郎の世界』　一九六七年十月　講談社

二　拓殖光彦氏は、〈このようなテーマがいかにして大江の内部に生まれ、六一年ごろまでも続きえたのか〉という問題は難しいとしつつも、『奇妙な仕事』や『飼育』の素材が他人から得たものであることを理由に、《監禁》の主題は〈大江の体験に根ざすというより、まずごく観念的なテーマ〉だったとした。この主題の生成について、サルトルとカミュの小説の設定の組み合わせによっていると推定している。そして、〈作家は自作を模倣するという格言どおり〉に、同一主題によるバリエーションが創られていったのではないかとする。この主題設定の意義を拓殖氏は、〈当時の大江はこれこそ現代的なテーマだと思いこんでいたのではあるまいか〉と、きわめて軽く見ている。

（「戦後世代のキーノート　大江健三郎」『国文学　解釈と鑑賞』一九六九年九月）

また、栗坪良樹氏は、出発期の諸作を大江がこのような主題に括ってみせたことに、〈精一杯の小器用さがつきまとって見える〉としており、やはり、大江の問題意識をほとんど顧慮していない。

（「作品とその評価史　死者の奢り」『国文学　解釈と教材の研究』一九八三年六月）

近年になって、團野光晴氏は、〈初期短編群に「監禁状態」という否定的な時代状況の表現を見〉、〈その中に生きる否定的な人物達になんらかの肯定性を直接読み取ろうとする論法〉が、適切でないのではないかとする。そして、大江の初期作品で目指されているのは、〈時代状況の表現及びそれに対する態度表明というよりも〉、〈大江自身の疎外感〉を、〈時代状況と関連づけていかに説得力あるように語るか〉ということだとみなしている。しかし、團野氏の論では、結局のところ、作品に現れている大江なりの状況への問題認識が、見逃されてしまっているようだ。

（「見捨てられた者の表現―大江健三郎初期作品試論」『金沢大学国語国文』　第17号　一九九二年二月）

三　「徒弟修業中の作家『朝日新聞』　一九五八年二月二日　（『厳粛な綱渡り』　一九六五年三月　文藝春秋新社　所収）

四　初出　『東京大学新聞』　一九五七年五月

五　《犬殺し》の方法は多義的である。《犬殺し》にとって、犬をうまく殺す彼の方法は、自己の卑劣さの発揮であると同時に、犬の苦痛と恐怖を軽減しようとする限りでの、犬への愛情の発揮でもある。そして、彼の方法は死の暴力性を見えなくし、死に感覚的充足を感じさせてしまうものでもある。この場合の充足は、社会的な禁忌にふれることになるだろう。

六　織田正吉『笑いとユーモア』（一九八六年五月　ちくま文庫）

織田氏は、笑いを起こす人物は、〈何かの意味で正常、平均値的でなく、欠陥や制約を持つ人〉だとしている。

（むらせ　よしこ）